

「2015 年が終わる」

2015 年 12 月 30 日

「戦後 70 年」と言われた 2015 年が、後一日で終わる。今年は暗く、息苦しい一年であった。9 月 19 日の未明に、参議院で「安保関連法」が強行採決された。この日が、日本が他国の戦争に加担する「記念日」にならないことを心から望む。軍備および交戦権を否認した憲法九条を無視し、自衛隊をいつでも、どこでも派遣できる体制になった。自衛のための武器保有は憲法に違反するかどうかの議論はあるが、大方、自衛力は認められている状況にあらう。しかし、他国の戦争に加わることには反対している。痛ましい戦争の体験から生み出された「平和憲法」は支持されていた。それを 180 度回転する「解釈改憲」がなされた。これに反対する国民の大きな盛り上がりがあった。全国に 7,500 もある「九条の会」は地道な市民運動を続けてきた。シールズやママの会などの若い人々が加わり、新たな展開を見せた。私も「九条の会」に参加して活動し、国会へも再三出かけた。安保関連法は決議されたが、廃案を目指す運動は止まることがない。以前と変わらぬ活動が続けられ、民主主義と立憲主義を守り、平和を実現しようとする気運は衰えていない。

アベノミクスの経済政策は株価を押し上げ、円安をもたらし、大企業は利益を得ている。その反面、貧富の格差は広がり、将来の生活設計に希望の持てない人々、一人親家族は貧しいまま取り残されている。6 人に 1 人の子どもが勉強はおろか、食べ物にも窮している。困難を強いられた人は時として、人生を投げ出し虚無的になり、それが社会の不安定要因を作っている。近年、そのような危惧を感じる事件、事故が多くなった。一家心中を凶った事件の報道には心が痛んだ。もちろん、当人の責任もあらうが、他人に助けを求められる社会環境を作る。また、戦争の準備をするより、国民が安心して生活できる状況を作り出すことが政治の優先する責務である。

現在の世界の危機は温暖化である。パリで COP21（国連地球温暖化防止条約第 21 回締結国会議）が行われた。法的規制や罰則のない総花的な議論だったそうだが、温暖化を抑えないと、異常気象によって人類は危うくなる。エネルギーを大量消費する経済成長を追い続けるより、国際的な分かち合いの哲学を打ち立てることが急務ではないか。

シリア人難民家族がヨーロッパを目指し、トルコからギリシアに向かう途中、ボートが転覆し、トルコの海岸に流れついた 3 歳のアイラン・クルディ君の遺体写真が発信され、世界に衝撃が走った。アイラン君の死はシリアの苦難の現状を物語っている。何百万人の人々が戦禍を逃れ、難民として流浪している。逃れられない人々は、テロ撲滅という理由の元で、有志連合軍の空爆に晒され、無辜の命が奪われている。彼らの悲しみ、苦悩は計り知れない。パリで起きた同時多発テロは許されないが、このような無差別テロの原因を突き止めない限り、テロは収まらないだろう。フランスでのテロは大々的に報道されるが、その他の中東、アフリカでのテロは、新聞に 10 行くらい掲載されるだけで、報道の非対称は、そのまま命の軽重を表している。

世界の混乱は排外主義を助長している。米国の大統領予備選挙で、トランプ氏は臆面もなく、イスラム教徒の入国拒否を語っている。日本でもヘイトスピーチは止むことがない。世界の諸問題は影を落とし、社会の荒廃は広がり、私たち自身の心も蝕まれている。見ること、聞くことが暗く、息苦しい出来事に囲まれた一年であった。

聖書は、飼葉桶から十字架までを歩まれた主イエスの苦難と死によって、全ての人が「神にあって生きよ」と是認された福音を告げている。時代が暗いほど、福音が示す愛と真実は輝いてくる。来る年も、神にかけた希望は欺かれることはない（ローマ書 5 章 5 節）。